

停電の中でのすき焼き食い おかしく切ない大震災余話

大正十二年の関東大震災は、東京の食べ物屋の「様相」を一変させたといわれる。たとえば、そば屋でカレーライスやカツ丼を売るようになったり、それまでホテルのロビー然としていたデパートの食堂が「総合大衆食堂」に変身、それに加えて、数多くの料理屋や飲食店が大挙して進出。「大阪ずし」「ぜんざい」などの名が東京でも知られるようになり、牛鍋にかわって「すき焼き」の名が一般的となった。

生前、夏目漱石門下の名エッセイストとして、その名を謳われた内田百閒（一八八九～一九七二）が、そんな当時の食風俗の一端を描いている。

「大正十二年の大地震の後は、諸事軽便になって、すき焼きも腰掛けで食べられるようになった。そんなある日、学生の一人を連れて上野の音楽会に行った帰り、山下の牛肉屋の土間ですき焼きをした。

地震から間もない晩秋のことで、まだ電灯線の修理も行き届いていなかったのか、停電することも珍しくなかった。

その時も急に鍋の上が暗くなり、私の所だけでなく、店いっぱいの客の前のコンロの火ばかりが薄赤く見えた。



やがて、帳場で何か号令するような声が聞こえたと思うと、大勢の女中が込み合ったテーブルの間を駆け抜けて表に出た。

煮立っている鍋の蒸気が、女中達の駆け抜けたあと
の風にあおられ、コンロと鍋のすき間からもれる赤い
火の色を映して、あたりに「大げさな気配」がした。

そのうち、帳場の方から、はだかのローソクを立て
た燭台が配られて来たが、ほとんど同時に電灯がつき、
思い出して入り口の方を見ると、なんと、さっ
き駆け出した女中たちが一列横隊になって人垣
を作っていたのである」

停電にまぎれての食い逃げ防止のためだが、
おかしく切ない風景である。